20周年記念号

緩和ケアだより

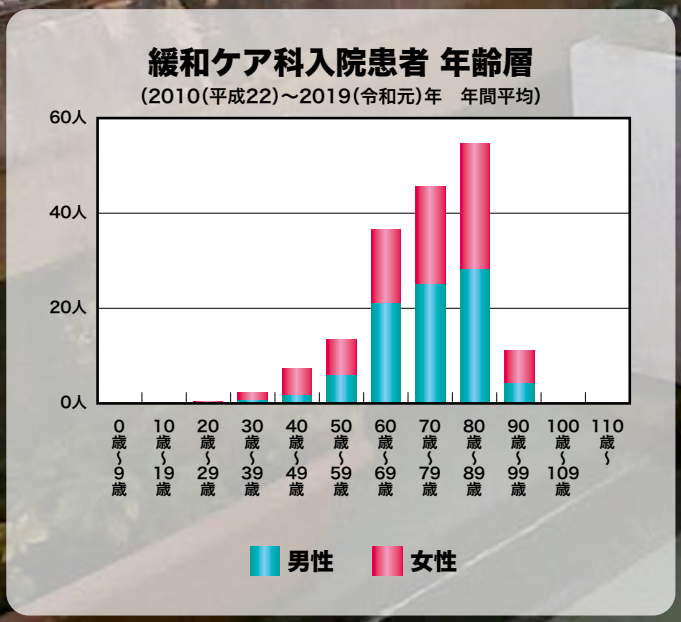
Palliative Care Unit

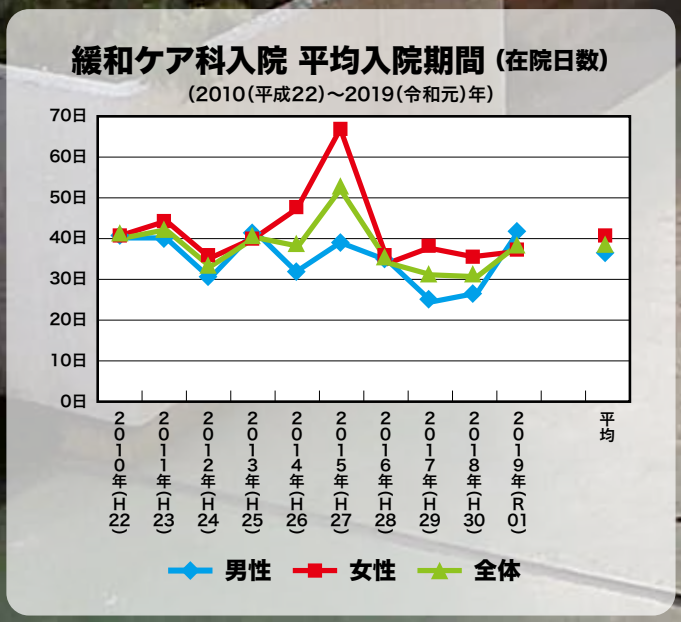
Vol.24
2021

緩和ケア病棟理念

山口赤十字病院緩和ケア病棟は
入院患者さんとそのご家族が
穏やかに過ごせるように
赤十字基本原則の人道に基づいて
心ひとつに　明るく
あたたかく　広く
静かな環境とホスピスマインドをもって
ケアを提供します

「生命を診る」
「いのちを診る」
「家族を診る」





山口赤十字病院緩和ケア病棟

20年のあゆみ

1990年 2月	●「がんと末期医療を考える会」発足
	●院内にターミナル研究会設立
1992年 12月	●山口県内初の緩和ケア病床設置（3床、既設病棟を改築）
	●訪問看護開始
1993年	●「がんと末期医療を考える会」が知事に緩和ケア病棟整備促進を要望
	●県議会でがん医療体制整備として緩和ケア病棟を考える意向を知事が表明
1994年から3ヵ月	●山口県研究事業「山口県における緩和ケアに係わる調査・研究事業」を実施し、山口県における緩和ケアのあり方の提言書を提出し、山口県地域医療計画の中に緩和ケアが取り上げられた。
1994年	●山口県緩和ケア研究会設立
1999年 11月1日	●現東病棟竣工に伴い、東8階に25床の緩和ケア病棟オープン
2003年 5月	●山口市在宅緩和ケア推進事業開始 事業内容 ①山口市在宅緩和ケア推進会議の開催 ②在宅緩和ケア支援福祉サービスの充実 ③相談体制の整備 ④市民への普及啓発、情報提供 「在宅緩和ケア便り」（年2回）の発行 市民公開講座の開催 ⑤関係従事者等への研修会及び指導体制の整備 事例検討会（年5回） ⑥在宅緩和推進のために必要な調査研究
2004年 9月	●山口市在宅緩和ケア支援センター運営開始 山口市より山口赤十字病院へ委託
	●笹川医学医療研究財団ホスピスナース研修施設に指定
2005年	●第29回日本死の臨床研究会を山口市で開催
	●笹川医学医療研究振興財団と公立大学法人山口県立大学の助成を受け「ホスピス・緩和ケア病棟におけるHIV感染者およびエイズ患者の受け入れ体制確立に向けての指針」調査研究
2007年	●院内緩和ケアチーム開始
2007年 10月	●日本医療機能評価機構付加機能（緩和ケア機能）認定
2008年 2月	●山口県緩和ケア支援センター運営開始 （～2011.3まで。4月から相談事業は市単位ではなく、県が一括して担当）
	●自助グループ「蕗のとうの会」を発足
2008年 2月	●がん診療連携拠点病院に認定
2009年	●笹川医学医療研究財団医師研修施設
2010年 3月	●緩和ケア病棟10周年記念講演会
2012年 8月	●日本医療機能評価機構付加機能（緩和ケア機能）認定更新
2014年 9月	●緩和ケア科医師が1名体制となり、外科主治医持ち上がり体制を導入
2015年 2月	●緩和ケア科医師が2名体制となり、外科主治医持ち上がり体制は中止、緩和ケア科単科の病棟にもどる
2017年 2月	●特定非営利活動法人日本ホスピス緩和ケア協会の緩和ケア病棟における質向上の取り組みに関する認証を取得
2019年 1月	●特定非営利活動法人日本ホスピス緩和ケア協会の緩和ケア病棟における質向上の取り組みに関する認証更新
2020年 11月	●緩和ケア病棟開設20周年

緩和ケア科入院患者 がんの種別

（2010（平成22）～2019（令和元）年　年間平均）

山口赤十字病院緩和ケア

院長　末兼浩史

緩和ケアは地域の中で癌診療を人として最後まで責任を持って見るための必須の部門で病院の旗印です。緩和ケア東8病棟の看護師はいつも真摯に患者様の心に寄り添い多岐の原因の疼痛コントロールにも精通し、やすらぎと安心の提供を心掛けるプロ意識にいつも感心しています。末永前副院長が志を持って立ち上げた20年の歴史があり専用病棟は25床で山口県最初の特定病床として地域のボランティアの方々の支援もいただき維持してきました。しかしながら、2021年6月をもって当院の緩和ケア内科医はそれぞれの事情があり3名とも退職することになりました。小生、2020年4月より新任の院長となり、同年12月より緩和ケア病棟には医療用麻薬管理や病棟カンファレンス等で毎日病棟へ顔を出し、2021年7月からは東8病棟の責任者として働いています。病棟に緩和ケア内科常勤医が不在となりましたが、病院方針として20周年となる東8病棟は、ホスピス機能を残し、最後の御看取りに限らず、癌患者さんの心身的疼痛ケア及びやすらぎと安心を与え体調回復して自宅へ戻る支援もできる緩和ケア病棟として維持するつもりです。緩和ケア内科医は医局派遣がなく2020年10月より公募をかけ継続していますが、後任が見つからないまま現在に至っています。院内で緊急の話し合いを持ち、緩和ケア部長を週1回の外来勤務で引き留めて疼痛管理の指示をもらいながら、それぞれ各科がかかわってきた患者様が末期の状態に陥った時、緩和ケア病棟の担当医はそのまま各科持ち上がりで患者を受け持つシステムに変更して緩和ケア病棟部門維持を図っています。緩和ケア外来は院内コンサルト専用として、外部からの癌末期の患者様の紹介は臓器別に診療各科が診察担当しますが、院内で現状を維持しながら、受入れシステム立直しを図る時間を頂き、緩和ケアシステムが完成・落ち着いたら、理念に沿って山口市内の緩和ケア対象の患者様を受入れたいと考えています。（徐々にではありますが、在宅診療の末永Drと田村医院からは訪問看護を介して患者紹介後、直接東8病棟へ受け入れの実績を作りました。）

今後も地元医師会を中心とする在宅緩和ケア診療施設、訪問看護ステーションとの連携の上、地域の皆様に継ぎ目のない安心な医療を提供出来る様に努力を続けますのでご理解の程宜しくお願い申し上げます。

病棟 20周年に寄せて

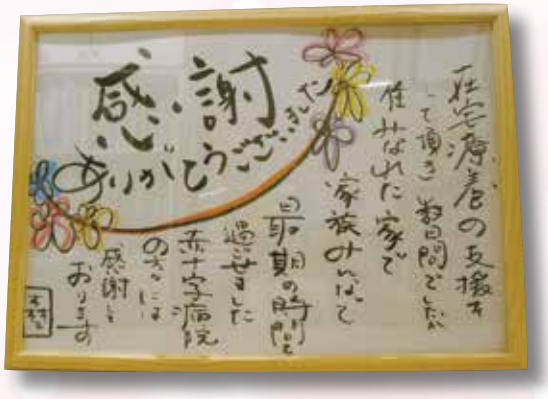
前院長　名 西 史 夫

新築の東病棟の最上階である8階に25床の緩和ケア病棟が開設されてから20年がたちました。緩和ケア病棟としては山口県で初めて、また全国の赤十字病院でもさきがけとなるものでした。今日まで、多くの皆様のご指導、ご支援を賜りました。特に、たくさんのことを教えていただきました患者さんやご家族、絶えず援助いただきましたボランテイアの方々、地元の医師会をはじめとする医療施設や介護福祉施設の方々、ご支援いただきました山口県および山口市、そして緩和ケア病棟に関わられたすべての職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

緩和ケア医療はここ20年間で新たなひろがりを見せてきています。当院でも、緩和ケア病棟の運営の他に、がん末期の患者さんやご家族が安心して住み慣れたところで有意義な生活が送れるようにと外来診療および在宅緩和ケア医療に積極的に取り組んできました。院内に設置されている山口市在宅緩和ケア支援センターでは、がん患者さんやご家族、在宅緩和ケアに関わる医療従事者の相談窓口としての業務および地域の在宅緩和ケア従事者の研修活動および在宅緩和ケアに関する啓発活動に取り組んでいます。

急性期の総合病院の中に緩和ケア病棟がある意義について私なりに時々考えることがあります。がん末期の患者さんに対する継ぎ目のない医療が可能であること、緩和ケア医療と急性期医療のお互いの知識や技術を補完し合うことでさらに質の高い包括的な医療が提供できること、緩和ケア病棟で学んだ看護師が急性期病棟に配置換えになることでがんのみならず他の疾患の末期患者さんへの専門的なアプローチが可能になること等が頭に浮かびます。

病院はますます忙しくなり、そして、仕事はますます専門分野に細分化されてきていますが、職員の皆様には少しゆったりした広いこころを忘れずに仕事をしていただけたらと思います。緩和ケア病棟がいつまでも山口赤十字病院のシンボルの一つとして輝き続けられますように。



「ホスピスへの歩みを振り返って」

すえなが内科在宅診療所　末永和之

昭和49年大学医学部を卒業後、６年間法医学の道をあゆみ、病死以外のあらゆる死を見つめてまいりました。その時、人は、畳の上で看取られて死ななければならないとの思いが強く心に刻まれました。

昭和54年、山口赤十字病院において内科・消化器内科医として勤務し診察、検査、治療を実践してきました。

平成２年２月、一人のがん患者さんとの出会いがホスピスへの歩みとなりました。自分が診断した直腸がんの末期状態の患者が、「末期医療の充実とは何か。人間の死を尊重してくれるということだ。懸命に生きてきた人生最後の場所が、家族は肩身狭く付き添う大部屋とは。こんな惨めな死があっていいのか。死がわかっていても『死に体』ではない。最後の最後まで『生き体』なのだ」といういのちをかけて訴えた事に心を動かされました。早速、山口赤十字病院内に「ターミナルケア研究会」を設立。平成４年に山口県内で初めての三床の緩和ケア病床を設置しました。

現在は医療の進歩によりがん患者の６割を超えて５年生存があるようになりましたが、病床で向き合う患者はこころの「ゆらぎ」の連続の中にあります。

「がん」という言葉は、「死」と直結しまいがちであり、その病名を告げられただけで、頭の中は真っ白になり不安が広がります。「自分はどうなるのか」「治るのか」「死んでしまうのか」「手術は上手くいくのか」「仕事は？」「家族は？」。希望と失意と不安の繰り返しです。そして、病気の進行とともに、愛する人との別れを感じ、自分のことができなくなる現実に直面されます。

人は物語を生きています。一人ひとりに春夏秋冬があります。その最後の瞬間まで、「いい人生だった」と納得できる、意味を見出してもらえる寄り添いをしたいと願っています。「看取り」とは、看取られる人の全人生を看取ることであり、ただ臨終に立ち会うことではありません。看取られる人は、その生き様や死に様を通して、「いのちとは」を教え、看取る側は、共に死にゆく存在として「いのち」を共有することに気づきます。ホスピス緩和ケアとは、悪くて、だめだから行く最後の場ではなく、その瞬間までより良く生きる場であり、それを支え、橋渡しをする場であり、そして、いのちを通じて、生きるということを考え、学ぶ場であると考えています。

在宅、地域、行政にもホスピス緩和ケアの輪を広げるために、行政にも働きかけ、平成11年、全国の日本赤十字社93病院の中で初めて、25床の緩和ケア病棟を新設しました。また、県議会に請願を重ね、県内他病院にも緩和ケア病棟を拡大。平成15年、山口市と在宅緩和ケア推進事業をスタート。全国に先駆けて、65歳以下のがん末期患者も福祉サービスを受けられるようになりました。

山口赤十字病院を定年退職後、平成25年すえながが内科在宅診療所を開院しました。今日も、24時間体制で訪問診療を続けています。

地域包括ケアシステムの中で住み慣れた地域や自宅で過ごし人生の最終章まで患者家族に寄り添う医療、ケアをしたいと思います。現在、年間約50－60名の方々を住み慣れた自宅で看取っています。今後の緩和ケア病棟は地域緩和ケアを構築していく上で、拠点病院、緩和ケア病棟、在宅充実診療所の３つが核となって日本型のトライアングルのあり方を具体的に模索する方向性が示されています。緩和ケア病棟はますます従来型の緩和ケア病棟として看取りを中心に、地域連携としてのバックベッド機能を果たしてゆくことが求められています。

今後とも皆様方のご支援をよろしくお願いいたします。

合掌

「Enjoy every sandwich」

山口在宅クリニック　佐野隆信

このたびは二十周年おめでとうございます。その半分を緩和ケアで、あと半分は開業医として過ごしましたが、心に響くことばとの出会いが減ってきました。そんななか哲学者、鷲田清一氏のコラムに見つけたのが、「Enjoy every sandwich」米国のロック歌手ウォーレン・ジヴォンの言葉ですが、昔から注目していた人物なので嬉しい驚きでした。酒びたりだった彼は余命三ヶ月の中皮腫と診断され、その三ヶ月後に人生どう変わったかと聞かれ前のように答えたそう。状況はどうあれ日常を感謝して楽しむべき、といった意味でしょうか。それから彼は心を入れ替えアルバム製作に取りかかり約一年後に完成、二週間後に穏やかに息を引き取ったとのこと。まるで黒澤明の「生きる」みたいだけど、こういう奇跡に出会うのが楽しみです。最後に彼の音楽仲間ジャクソン・ブラウンの歌詞より、「With my maps and my faith, …moving further on（FURTHER ON, 1974）もう少し歩いてみよう、ぼくのサンドイッチを探しながら。

「緩和ケア患者様の心のよりどころ、20年の軌跡」

医療法人 相川医院　山口市在宅緩和ケア専門部会　部会長　相川文仁

綜合病院　山口赤十字病院　緩和ケア病棟開設20周年誠におめでとうございます。

私は現在山口市在宅緩和ケア専門部会の部会長を仰せつかっております、吉南医師会の相川と申します。山口県の緩和ケアをリードされ専門病棟を開設され20年を迎えられましたことをお慶び申し上げます。

また、綜合病院　山口赤十字病院は、大正9年日本赤十字社山口支部病院になって、100年の歴史をはぐくまれた、山口市いや山口県にとってなくてはならない医療機関でもあります。

100周年の記念もまた、ご苦労が絶えなかったと想像しうるのはわたくしだけではなく、多くの診療所の先生方、さらに患者様も頼りになる病院として、いつもお世話になっているところです。

現在の綜合病院　山口赤十字病院　緩和ケア病棟の歴史を末永和之先生の過去のスライドから引用させていただきますと、1990年に「がんと末期医療を考える会」を発足され、それに続いて山口赤十字病院内にターミナルケア研究会を設立されています。1992年には病院内に山口県下初の緩和ケア病床3床を設置され、緩和ケア病棟の基礎がスタートされています。そして、1999年25床の緩和ケア病棟が承認され、20年が経過した素晴らしい歴史のある病棟となられました。

多くのがん末期の患者様方やご家族が訪れ、その病棟で癒され納得し、疼痛の管理や心のケアも受けられてこられたことと思います。がんの終末は決して楽なものではありませんが、緩和ケアの目的が市民・県民さらには国民に認知されて来たことは、在宅緩和ケアのお手伝いをさせていただいています私しども開業医にとっても心強いかぎりです。

緩和ケアのゴールは病院で終末を過ごすことではありません。いろいろな終末があり、それぞれのニーズにこたえながらのケアであります。在宅での緩和ケアも早くから取り組まれ、住み慣れた我が家で安楽な生涯を送られることにも寄与されてきたこと存じます。

最近の緩和ケアはがん患者様だけではなく、非がんの患者様にも適応を広げつつあります。がん患者様に特化した緩和ケアの取り組みは引き続きこの病棟が担われることと存じますが、ますますのご発展と多くの患者様の心の支えとなりますよう記念しまして、山口赤十字病院　緩和ケア病棟開設20周年のお祝いとさせていただきます。

上田宏隆先生をはじめとした先生方、また看護師の皆様、さらにはCWや他のスタッフの皆様の今後のご活躍を祈念いたしまして私の寄稿とさせていただきます。

「在宅緩和ケアとの関わり」

医療法人　真人会　たむら医院　田 村 正 枝

この度は、緩和ケア病棟開棟20周年をお迎えされ、おめでとうございます。

日本における、緩和ケアの先駆けとして、山口市民として誇りに思います。

さて、私は内科医院を開業して26年になりますが、当初から往診をしていました。平成15年に山口市在宅緩和ケア推進事業が開催され、その時に、当時の部長先生である、末永和之先生と出会いました。緩和ケアという言葉は知っていましたが、患者様に寄り添うそのお気持ちに深く感動したものでした。初期メンバーである山口市医師会の野村幸治先生や訪問看護ステーションの岡藤さんに加え、山口市の当時の高齢福祉課の有田さん達とは、垣根を越えて、喧々諤々と遅くまで話し合っていました。

最近になり声高に多職種連携が言われていますが、当時から医師、訪問看護師、薬剤師、ヘルパー、福祉用具業者さん達との連携は必須条件でした。特に訪問看護さんの力は絶大で、私のように一人で医院を切り盛りしていると、大変助かります。

普及活動もあり、次第に市民の皆様にも、在宅での看取りを理解していただくようになったと、思います。麻薬の種類も増え、痛みを無くして、楽に最期を迎えられるように、変わってきました。

最近、在宅治療で有名なたんぽぽ先生こと永井康徳先生のご講演を拝聴する機会がありました。そこで一番心に残ったのが、「患者本位であること」「楽なように、好きなように」「看取りの前は点滴をしない」というお話でした。

「多死社会を迎える日本で、救えるのは在宅医療だ！と、声高くお話して頂きました。これからも精進を続け、少しでもお役に立つように頑張っていく所存です。どうぞ、これからもよろしくお願いします。

「日赤病院の緩和ケアと山口市在宅緩和ケア推進事業、共に歩み」

のむら内科胃腸科医院　野 村 幸 治

今から約35年前から山口市には「がんの終末期」をどのようにすごすかについて、市民、いろいろな職種の方が考える流れや会の設立がありました。日赤病院の末永先生がいち早く行動を起こされ、会の運営などに携わっておられました。私も済生会病院で多くのがんの方を病棟で看取っていたので、そのひと達が「自分の思いのままに最期を生きる」にはどんな事が出来るかといつもスタッフと考え、対応していました。その後、私は開業医となり、がんの終末期を自宅で看取る事もありました。そして、平成12年に多くの関係者の協力のもとに日赤病院に緩和ケア病棟が設立され、当初に紹介入院させて頂いた方もありました。

山口市では全国に先駆けて医師会と行政が協力し、平成15年から「山口市在宅緩和ケア推進事業」を立ち上げ、開始することとなりました。そのために、私も山口市役所の有田さん達と医院の診察が終わったあとに、何度も、夜遅くまでその打ち合わせをした事を思い出します。日赤病院の緩和ケア病棟や在宅緩和ケア支援センターの存在が、この事業を運営するために大いに役立ちました。

日赤の緩和ケア病棟には何度か訪問させて頂きましたが、やすらぎと安心で過ごせる場所で、今では多くの山口市民に認知されています。

「住み慣れた我が家で最期を過ごす」ことを目的としていた、山口市在宅緩和ケア推進事業の設立の頃から時代は変わり、年を取って暮らす場所が「自宅」から「施設」に変わりつつあります。今でも、毎年、多くの方が「がん」で亡くなる中に、「日赤病院の緩和ケア病棟、在宅緩和ケア支援センター」はこれからも山口市民にとって、「安心」を提供して頂き、そして「感謝」されるものと思っています。

「いのち～20周年によせて」

田村医院　田 村 博 子

開設20周年とうかがい、感慨深く思っています。私と日赤緩和ケアとの関りは医学生だった1993年だったでしょうか、同級生から夏休みの見学実習に誘われ、私も1日だけお邪魔した時からだと思います。3部屋ほどの緩和ケア病室の1室に見覚えのあるスペイン人シスターのお名前を見つけ、故国を遠く離れてどんな思いでおられるのかしらと思った記憶があります。

その後、緩和ケア病棟が開設される直前の1999年10月までに相次いで両親をがんで見送りました。両親との最期の日々はその後在宅診療に向かう私の原点になりました。末永先生、上田先生はじめ支援センターの皆様には本当に助けられてきました。そしていろんな患者さんから多くを学ばせていただきました。

20年間を思い出すときりがありませんが、2015年の市民公開講座の座談会に一緒に登壇した当時のNHK山口局長・坂井律子さんのことだけ、ここに書きとどめておきたいと思います。坂井さんは出生前診断の取材をきっかけにいのちについて考え続けてきた方でした。この時の市民公開講座はドラマ「ボクの妻と結婚してください」の後藤高久プロデューサーを特別講演にお招きした会でした。半年後、坂井さんは主人公と同じすい臓がんにかかり、2年半の闘病後亡くなりました。「＜いのち＞とがん患者となって考えたこと」という著書を遺して。あの時の市民公開講座のテーマは「別れる人に残せるもの」でした。最期まで伝え手であった坂井さんの残したものを胸にこれからも歩み続けたいと思います。

日赤緩和ケアの皆様、これまでありがとうございました。そしてこれからもどうぞよろしくお願いいたします。

「驚くべき善意のグループ」

医療法人 桃圭会　淵上整形外科　　前山口市医師会長　淵 上 泰 敬

関節リウマチの68歳男性が当院に８年前から通院されています。ＭＴＸで関節の炎症状態は安定していますが、肺がんの末期のため他院で２種類のオピオイドを処方されています。おしゃれで、きちんとした身なりをされていて、にこやかで、達観している、そんな印象を受けます。「来週入院したら、そのままかもしれません」と微笑んで言われると、私も微笑むしかありませんでした。おそらく、この男性にも五つの段階があったでしょうが、私が気づいた時にはすでに受容されていました。2012年10月に「山口県緩和ケア医師研修会」に参加し、末永和之先生、上田宏隆先生に緩和ケアにおける基礎などを教わっておりましたが、いつもいつも心構えの難しさを感じます。1996年に62歳で亡くなったカール・セーガンは「百億の星と千億の生命」で「私が病気になって発見したことの一つは、驚くべき善意のグループが存在するということだ」と記しています。「山口県緩和ケア医師研修会」で感じたのは、この先生たちはみんな「驚くべき善意のグループ」の一員なんだということです。20年目の節目を迎えられる緩和ケア病棟および在宅緩和ケア支援センターもまた「驚くべき善意のグループ」です。カール・セーガンは「悲観的になって落ち込みそうになったとき、善意の人がどんなに多いとかを思い出すと勇気づけられる」と語っています。緩和ケア病棟および在宅緩和ケア支援センターの皆様が、今後とも緩和ケアを必要とする患者さんおよびそのご家族を勇気づけられますよう、祈念いたします。

「緩和ケア病棟開設20周年おめでとうございます。」

岡山赤十字病院　緩和ケア科　喜多嶋　拓　士

平成19年５～６月の２ヶ月間、研修生として受け入れていただいた私にとって、「専門的な緩和ケア」とはすなわち、「山口赤十字病院緩和ケア病棟」と同義語に他なりません。

末永先生、小野師長を中心として、患者さんの「いのち」と真摯に向き合う病棟スタッフや、薬剤師、栄養士、MSW、音楽療法士、リハビリスタッフなどの専門家からなる多職種チームの協力、ボランティアの方々の心温めるサポートは、まさに「理想的な緩和ケア」を実現したものであったように感じられましたし、当時は病院内にあった訪問看護ステーションと連携しながら在宅緩和ケアも部分的に担っておられ、患者さんやご家族の様々な希望を叶えるための体制の整備や努力する姿勢に感銘を受け、このような環境で働くことができる、私と同時期に入職された上田先生（現緩和ケア科部長）をずいぶんうらやましく思ったものです。

その後、私は岡山赤十字病院に於いて緩和ケアに取り組んでまいりましたが、入院ベッドもない状況からスタートし、優秀な緩和ケアチームメンバーの活躍や、新たな医師や認定看護師の存在にも後押しされ、６年前には緩和ケア病棟を開設するところまで漕ぎ着けました。当時の研修で得た経験と、「理想的な緩和ケアを実践している山口赤十字病院緩和ケア病棟」の存在が心の拠り所となっていたことは間違いありません。心より感謝いたしております。

昨今は「人生100年時代」と言われてアンチエイジングが礼賛され、医療機関に於いては「医療安全と危機管理」「業務の効率化」といったものが優先事項のように思われますが、そんな時代だからこそ、「ホスピスマインド」が真に「いのち」を大切にする考え方であり、緩和ケア病棟で行われている看護・介護が「本来のケア」の姿勢ではないかと感じております。貴院の緩和ケア病棟がそういったものの象徴の中心であり続けることを願ってやみません。

山口赤十字病院　薬剤部長　尼崎 正路

今から約25年前、ちょうど父親が胃がんで他界した後に、前副院長・緩和ケア部長の末永和之先生から「一緒に緩和ケアに取り組まないか？」とお声がけいただき、その頃から緩和ケア分野への関わりが始まりました。その後、緩和ケア病棟が設置され、この度20周年が経過することとなりました。薬剤師の立場からは緩和ケア病棟の側方支援的な事も多く、直接患者さんと関わらせていただいたケースは年数の割には決して多くはありませんが、幾人かの患者さんの療養へ携わらせていただきました。自分の中では、症状コントロールが思うように行かなかった事例などむしろ苦い経験の記憶の方が多いのですが、心に残る患者さんが数多くおられます。残念ながら私は緩和のベッドサイドから少し離れてしましましたが、その時の経験が、自分の医療人・薬剤師としての判断や、様々な考えの基盤になっていると思っています。そして、私のみならず病院の中に緩和ケア病棟があるということは、病院全体の思想にも少なからず影響があるものとも感じています。

さて、薬剤に関してはこの20年間に疼痛の研究は進み、疼痛関連遺伝子も解明されるようになり、数多くの鎮痛薬が発売されてきました。こうした新規薬剤への先進的な取り組みも当院の緩和ケアが果たす役割の一旦と考えています。ただし今でも、疼痛以外の身体症状を緩和する薬剤の研究はまだまだ発展途上です。今後様々な薬剤が開発され、新規薬剤を県内に普及させる一翼を当院緩和ケア病棟が果たして行くことを願っています。

近年、アドバンスケアプランニング（ACP）・人生会議といった言葉も使われるようになりましたが、ホスピス・緩和ケアといった言葉は認知が進んできたように感じられます。しかし、現実に自分あるいは家族が病気になった時、あるいは自分自身、将来の療養の場としてホスピスという存在が積極的に語られるものとは言い難い？とも感じています。今後、緩和ケア病棟そして在宅緩和ケアが市民のより身近な選択枝としてより認知され・議論され・より一層普及することを望んでいます。

山口赤十字病院　看護部長　大林 由美子

山口赤十字病院緩和ケア病棟はこの度、開棟20周年を迎えることができました。この記念すべき節目を迎えることができましたのは、ひとえに患者さんやご家族、地域の医療・介護関係機関の皆様など、多くの方々のご理解とご支援の賜物であり、ここに改めて深く感謝申し上げます。

当院の緩和ケア病棟は、東病棟竣工時の平成11年に県内初の単科の病棟として運営を開始しました。この20年の間にがん診療は進展し、療養のあり方も変化してきました。このような時の流れの中で、「わたしたちは、地域の皆様にあたたかな信頼のおける医療を提供します」という病院の理念のもと、病棟では患者さんがご自身の「いのち」と向き合う大切な時期に、できるだけ快適な療養環境を提供できるようにとの思いで看護にあたってまいりました。療養中に生じる様々な症状や問題に対応するために、医師、看護師をはじめ、薬剤師や医療ソーシャルワーカー、管理栄養士など、多職種の連携にも取り組んでまいりました。

また、多くのボランティアの方々の活動にも支えられてきました。四季折々の「おもてなしの心」で、患者さんやご家族だけでなく、職員もが「癒しと安らぎ」を頂いてきたように思います。患者さんやご家族の方からも多くのお言葉をいただき、たくさんの学びも得てきました。

患者さんそれぞれが、尊厳をもってご自身の人生を自分らしく過ごせるように援助することが緩和ケアに求められるものだと思っています。開棟から今日まで、働く職員は変わりましたが、「患者さんに寄り添う」気持ちは、時がたっても変わらず大切にしてきた姿勢だと思っています。

今後も在宅療養を含め、「ここで療養してよかった」と実感して頂けるよう職員一同努力する所存です。20年の節目を機に、新たな決意で皆様のご期待に沿えるよう精進してまいりますので、引き続きご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

山口赤十字病院　医療社会事業部　看護師長　緩和ケア認定看護師
（元 緩和ケア病棟　看護師長）　小 野 芳 子

緩和ケア病棟開棟 20 周年おめでとうございます。私は 1999 年 11 月に開棟してから 2014 年までの約 15 年間お世話になりました。病棟開設前から考えると約 18 年もの長い間、緩和ケアに携わって参りました。緩和ケア病棟では 3000 人を超す患者さん・ご家族との出逢いとお別れのなかで私自身が一人の人間として成長させていただきました。私の看護師人生 35 年の中で一番楽しくてキラキラした時間でした。

北は北海道、南は沖縄から熱い思いを持った医師・看護師など医療者や学生さんたちが緩和ケア病棟に研修にきて下さいました。その方々との出逢いも私の宝物です。2003 年に緩和ケア認定看護師の資格を取り、自分に何ができるかを考えたとき、研修に来て下さった方々にホスピスマインドの種を持って帰ってもらい全国に「種蒔き」をしてもらうことが役割と考えました。きっと、それぞれの病院や地域でその土壌にあったホスピスの花が咲いていると思います。時代が変わっても、「ホスピスマインド」は医療の原点だと思います。これからもホスピスマインドを大切にして患者さん・ご家族に関わっていきたいと思います。緩和ケア病棟のますますの発展をお祈りいたします。

多いときは 70 人 / 年を超していました。

山口赤十字病院　南6階病棟　看護師長
（前 緩和ケア病棟　看護師長）　立 石 裕 子

私は平成 26 年から平成 29 年の 4 年間、緩和ケア病棟の看護師長をさせていただきました。緩和ケア病棟へ異動することが決まり、自分がこの歴史ある病棟を背負えるのか不安とプレッシャーで胸がいっぱいになったことを今でも覚えています。4 年間の歩みでしたが、開設 20 周年の中に参加できたことを誇りに思います。

現在の緩和ケア科医師は 3 名ですが、私が異動した時は医師が 2 名から 1 名体制となり、緩和ケア病床を他科が半年間でしたが利用する状況となりました。その間も病棟師長として創立からの歴史（看護の質）を壊してはいけないというプレッシャーの中、どう維持をしていけばよいのか、それは在籍していた 4 年間ずっと脳裏から放れることはありませんでした。そんな中、救われたことは周囲には素晴らしいスタッフがいてくれたことです。緩和ケア病棟は、チーム医療なくしては成り立たないことを実感しました。

また、緩和ケアで学んだことは、看護師になり一般病棟での経験しかありませんでしたが、緩和ケアに携わり患者さんやご家族の気持ちに正面から向き合うこと、人との接し方や寄り添い方を改めて学ぶことができました。恥ずかしながら、経験は年数ではないことがわかりました。

これからも、医師、看護師、をはじめ、薬剤師、栄養士、医療ソーシャルワーカー、理学療法士、作業療法士、ボランティアさんなど多くの職種が、それぞれの専門性を生かせるチーム医療を実践していただきたいと思います。私自身、同じ病院内のスタッフとして緩和ケア病棟への協力を惜しむことなく、協働していきたいと思います。ますますの緩和ケア病棟のご発展をお祈りいたします。

山口赤十字病院　緩和ケア病棟　看護師長
がん看護専門看護師　金子美幸

2019 年 11 月に山口赤十字病院の緩和ケア病棟は開設され、2020 年 11 月に 20 周年を迎えました。1992 年山口県初の緩和ケア病床 3 床の設置から数えますと、27 年の歴史ある病棟となり、緩和ケア病棟で、これまでに多くのがん患者さんやそのご家族が過ごされました。患者さんやご家族によっては、緩和ケア病棟に対していいイメージがなく、一般病棟から緩和ケア病棟に転科転棟されるまでの期間が長くなる場合もありますが、緩和ケア病棟に転棟されて、ホスピスマインドを受け継いでいるスタッフのケアに触れることで、「もっと早くここに来ればよかった」というお言葉をいただくことも多いです。そのたびに緩和ケアの必要性を日々実感しています。このような患者さんやご家族が、必要な時期に緩和ケア病棟に移行できるように一般病棟や各科外来、関係する多職種と連携しながら調整に努めていきたいと思っております。

私は、平成 30 年 2 月から緩和ケア病棟の看護師長に着任しました。13 年間緩和ケア病棟で勤務した後に、平成 26 年 10 月から看護師長、またがん看護専門看護師として組織横断的に緩和ケアチームの活動を行い、緩和ケア外来と連携して活動してきました。そして 3 年 3 か月ぶりに再び緩和ケア病棟に 6 人目の病棟看護師長として戻ってきました。これまで勤務された看護師長や看護師の皆さんが種まきされたホスピスマインドを引き継ぎ、継承していけるように病棟スタッフとともに努めているところです。病棟スタッフは、いろいろな病棟を経験したベテランのスタッフが多く、「その人らしさ」ということをとても大切にしながら、日頃のケアを提供しています。病棟スタッフの実践は、病棟の大きな強みのひとつです。

ここ数年で医療の進歩や情勢の大きな変化に伴って、緩和ケアを取り巻く状況も大きく変化してきています。少子化、超高齢化社会等を見据えた地域包括ケアシステム等により、緩和ケア病棟は、従来の病棟の役割とともに症状緩和をしながら地域につないでいく場所としての役割も担うようになってきています。希望される患者さんやご家族に対しては、ご自宅で療養できるように多職種と連携してお手伝いもしています。

今後も緩和ケアに関する知識や技術をさらに深め、ACP（advance care planning）をふまえ、患者さんやご家族に寄り添いながら穏やかな時間が過ごせる場所となるように病棟スタッフ一丸となり、努めていきたいと思っています。

開設から現在に至るまで、多くの方々のご支援で 20 周年を迎えることができましたことに　深く感謝いたします。今後ともよろしくお願いいたします。

山口赤十字病院　リハビリテーション技術課　課長　**河野　慎**

緩和ケア病棟開棟20周年おめでとうございます。

1999年、まだ私は入社6年目、「緩和ケア」を初めて聞く言葉でした。その年の10月に教育会館で開催された開設記念講演会に参加し勉強しました。リハビリテーション関連職は、そもそも障害を対象にし「障害の受容」は学んできたのですが、「死の受容」についてもこの時期に学びました。緩和ケア病棟の患者さんの担当になったときは、どのように関わるべきか悩んでいたことを思い出します。

2012年に三病院合同緩和ケア研修会にも参加しまして、その中で医師による患者へ告知するロールプレイがあり、告知される患者の気持ちだけでなく、告知する医師の苦悩を少し感じ取ることができ、がん患者を取り巻く環境や診療の流れを学びました。

2010年診療報酬改訂から「がん患者リハビリテーション料」が新設され、2012年より本院でも運用開始し、がん患者への関わりが周術期から終末期まで幅広く関わることとなりました。緩和ケアはがんの診断後から始まると学んだことを実践することになりました。そんな中、患者さんや家族から「なぜリハビリ？」と思われることもあり、対応に困ることもありますが、緩和ケア病棟では患者さんの残りの人生と向き合い、何を望まれているのかを感じ取ってリハビリテーション業務にのぞんでおります。

個人的なことですが、父もがんで他界し、治療にのぞむ父の姿をみて死を受け入れることなどとても難しく、家族や緩和ケア病棟のスタッフの関わりはとても重要であることを感じています。理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の緩和ケア病棟における役割は何か、20年を振り返り考え直しております。

山口赤十字病院　音楽療法士　米倉裕子

緩和ケア病棟開設 20 周年という記念すべき2020年に、緩和ケア病棟開設以来ずっと音楽療法を実践されていた前任の音楽療法士から音楽のバトンを受け取り、当院の２代目音楽療法士に就任いたしました米倉裕子（よねくらゆうこ）です。

1967 年にイギリスのシシリー・ソンダースが世界で最初に創設したホスピスでも、当初から音楽によるケアは大切にされていたという記録がありますが、当院の緩和ケアも開設当初から20年に亘りケアの一環としての音楽療法を理解してくださり、受け入れてくださっている音楽で溢れている病棟です。

音楽療法の父と言われる E・セイヤー・ガストンは、「もしも言葉が、人間の心のコミュニケーションを音楽以上にやすやすと行うことができたなら、音楽というものは存在しなかっただろう」と述べています。音楽は、私たちの身体や心の緊張をほぐし気持ちの表現を後押ししてくれます。また、あなたは決してひとりではないよ、とそっと寄り添ってくれたりもしますし、あなたはあなたのままでいい、と勇気をくれたりもします。そのように、私たちに多面的な影響を与えてくれる音楽は、複雑で様々な痛みを抱えている緩和ケアの患者さまたちのケアの一助として適したツールであると考えられています。私が緩和ケア病棟で出会った患者さまたちは、それぞれの人生に寄り添ってきた音楽のエピソードを時には楽しそうに、また、時には懐かしそうに、まるで大切な宝物をそっと見せてくれるように音楽療法士の私に話してくださいます。それは、たとえどんなに厳しい状況にある患者さまたちとそのご家族であっても、音楽というチャンネルが自分たちの生きてきた「いのち」に対して前向きな気持ちにさせてくれるのをきっかけに、それぞれの人生に対する感動と祝福のステージへと導いてくれるからだと感じています。

緩和ケア病棟のデイルームにあるピアノを弾いていると鳩の親子が飛んできます。また、緩和ケア病棟のバルコニーでは１年を通して色とりどりの花が風に揺れて気持ちよさそうですし、雨上がりには町を見渡せる大きな窓の正面にとても大きな虹を見ることがよくあります。このように、患者さまたちが少しでも豊かな時間を過ごせるように、これまでの 20 年間に沢山の愛情で整えられてきた当院の緩和ケアをとりまく環境のひとつとして音楽が在ることに胸を打たれるとともに、人生の大切な時間を音楽とともにご一緒させていただくことを許してくださる患者さまたちに心より感謝をしています。20年間育まれている当院緩和ケア病棟のホスピスマインドを心に刻み、これからも緩和ケアチームメンバーに支えられながら、音楽と手をとりあって患者さまたちの「いのち」と向き合っていきたいと感じています。

山口赤十字病院　元 緩和ケア内科　外来事務　**阿 部 博 子**

緩和ケア病棟開設20周年おめでとうございます。

平成20年から昨年の9月迄、約10年という長きに渡って事務として緩和ケア外来に携わりました。

緩和ケア病棟の施設も増加している現代ですが、“緩和ケア”・“麻薬”に対して、“負”のイメージを持っている人がまだまだ多いと思いました。しかし、実際は診察時に患者様の話をじっくり聞く事やご家族の悩み事の相談を受ける等、他の科以上にひとりひとりに寄り添った診察です。

また、“麻薬”を使用する事で痛みが和らぎ自分らしく生活される方々をたくさん見てきました。

今現在、私は在宅緩和ケア医療にも関係のある訪問看護ステーションの事務として勤務しております。

患者様やご家族と直接関わる事は減りましたが、“緩和ケア”との関わり、少しでも役に立てれば幸いです。

末筆ではございますが、緩和ケア病棟の益々のご発展をお祈り申し上げます。

元 山口赤十字病院　緩和ケア病棟　看護師長　**平 岡 恵 子**

緩和ケア病棟開棟20周年おめでとうございます。

私は退職前の４年間師長としてお世話になりました。

緩和ケア病棟では沢山のボランティアの皆さんと病院全体のチームで心地よい空間を目指しました。

理想と病院の中の病棟であるという現実。様々な要望に応える為に他病棟では叶わない事にもかなり対応できたのはチームの力です。沢山の思い出がありますがここで結婚式ができました。医師から家族に「お母さんには時間がない」と話があり結婚を決断されるのをサポートしました。結婚式当日、床に緋の絨毯を敷き、患者さんはベッドのまま参列されました。写真を撮る私に「撮らないで」と叫ばれましたが…後で「母は感謝していました」と。家族間で確執を生じていることは承知していましたが　患者さんの深い想いは計り知れないものがあることを教えられました。

退職して14年、この間身内５人を看取りました。次は私の番。その折はぜひお願いしたいと思います。

元 山口赤十字病院　音楽療法士　**前 田 のぞみ**

緩和ケア病棟開設の日、デイルームからは美しい虹が見られました。これから東８階病棟で始まる患者さんやご家族へのケアを象徴するかのようでした。早いもので、あの日から20年の歳月が流れました。

開設の前年、当院１階ロビーでの「朝のピアノ」を聴きに来られた患者さんとの出会いから始まった私の音楽活動は、病棟での音楽療法“リラックスタイム”へと展開しました。

音楽にはさまざまな特性があり、音楽療法ではそれを使って患者さん方に関わっていきます。音楽療法では感情の表出、不安や孤独感などの緩和、思わず歌ったり楽器を奏でたりしながら「今、この時を生きている」という実存感を得ること、また、時間や空間を越えて思い出の場面に戻り人生を振り返り味わうこともできます。さらに、音楽は言葉にならない思いを伝えるコミュニケーション手段としても有効です。

この20年間、私は患者さんやご家族の要望に沿って音楽を提供し、病棟で意味のある時間を過ごしていただけるように寄り添ってきました。多くの患者さん方と出逢う中、人は喜びの時や哀しみの時、辛さに耐えた時に流れていた音や音楽をこころのディスクに刻みながら生きていることや、人生の締めくくりの時に音楽でその人の持つ力を引き出すお手伝いができることなど貴重な教えをいただいてきました。

患者さん方はいつの時も私の師匠であり、緩和ケアにおいて音楽はさまざまな場面で力を発揮することを示してくださいます。

また、ご遺族によるコンサートでは、四季折々に病棟での音楽を豊かに彩っていただいています。今年３月末で私は退職しますが、長年患者さん方へのケアに携わりながらケアギバーである私自身もケアされていたと改めて感じる今日この頃です。

これまで音楽療法を理解しチームケアの一つとして受け入れていただいたことに心より感謝しつつ、これからも東８階病棟において人と人がふれあい、「こころの虹」が架かり続けるように願っています。

元 山口赤十字病院　MSW　**橘　　直 子**

1992年わずか３床の緩和ケア病床としてスタートした当院の緩和ケアの歩みは、2000年の新棟建設に伴い緩和ケア病棟としてケアの体制を整え、20 年を数えました。MSW は緩和ケアの歩みとともに心理社会的支援を担う職種としてかかわらせていただいてきました。病棟に携わるチーム多職種・ボランティアの協力もさることながら、がん診療に携わる各診療科からの協力も大きかったと思っています。また、2004年より山口市からの委託事業「山口市在宅緩和ケア支援センター」は、山口市・山口吉南地区地域ケア連絡会議（医師会、サービス提供事業所）といった地域の関係者の皆さまと協働して全国にも誇れる事業を展開してきました。

個人的には、緩和ケアにかかわらせていただいたことがワタシ自身、また MSW としての学びと成長に深く影響を与えていただけたと感じています。おそらく1000名は遙かに超える患者さんやそのご家族・関係者のみなさまと、最期まで生きること、そのあとも繋がっていくことを教わってきました。病棟から目と耳に映る、春の当院近くの自衛隊駐屯地の桜が、夏の同地で開催される夏の夕べの花火が、秋の当院向かいにある小学校の運動会練習の光景と歓声が、冬の山口という盆地特有の寒さによる雪景色などを五感でともに感じることができました。季節の移り変わりとともに患者さんやご家族のケアに幅をもたせてきていたと感じています。

新たなる緩和ケア病棟の一歩に、多職種のチーム力に、エールを送ります！

前 山口赤十字病院　緩和ケア内科部長　上 田 宏 隆

1992年に山口県内初の緩和ケア病床3床を、既設病棟を改築する形でスタートし、7年後の1999年に現在の緩和ケア病棟が東病棟8階に開設され、2019年に20年の節目を迎えました。これもひとえに患者さんやご家族の方々を支えるべく関わって下さった様々な方々のご尽力の御陰と感謝し、この誌面を借りて厚く御礼申し上げます。

記念誌発行にあたり、多くの方々に2019年の段階でご寄稿を頂いておりました。しかし、新型コロナ感染症の流行や緩和ケア病棟の体制自体も大きな変化があり、発行が大きくずれ込みましたことを、ご寄稿頂いた方々には深くお詫び申し上げます。ご寄稿の殆どは2019年にご依頼をお願いした時点のものを掲載させて頂いておりますことを申し添えさせて頂きます。

緩和ケア病棟の体制に関してですが、これまで当院緩和ケア病棟は永年緩和ケア医が常勤として主治医を務めておりましたが、2021年７月から緩和ケア病棟常勤医は不在のため、基本的に院内からの各科持ち上がり体制となりました。また、緩和ケア内科外来も2021年7月時点では他院からの紹介を十分に受けることが出来ておりません。現在、地域の皆様に継ぎ目のない安心した医療を提供出来るよう、末兼院長主導のもとで緩和ケア病棟含め当院の緩和ケア医療体制の再構築を進めておりますので、今暫くお時間を頂きますよう、ご理解のほど宜しくお願い申し上げます。

10年以上前に当院に赴任し、緩和ケアの領域に初めて足を踏み入れ、患者さんやご家族に対してこれまで内科医として診療時に抱えていた自分の中の不完全燃焼の部分はかなり解消した形で関らせて頂くことが出来ました。しかし、同時に緩和ケアに対し時に愕然とするような認識や理解を見聞きする状況にもなり、自分自身方向性を見失いかけることもありました。そのような状況も徐々に医療者の世代交代が進み、緩和ケアの考え方が浸透しているように感じることも最近は多くなりました。また、院内から各科持ち上がり体制となり、主治医が変わらないことで早期からのＡＣＰに沿った医療の提供も期待されるようにもなりました。今後は「身体を診る」という疾患に伴う症状対応はもちろんのこと、「いのちを診る」、「ご家族を診る」といった３つの視点を「緩和ケア」の礎とし、一般病棟でも緩和ケア病棟と同じようなスタッフ体制や療養環境下で治療やケアが提供され、より緩和ケアの考え方が浸透することを期待したいと考えます。そして、それでも尚、緩和ケア病棟の存在感を打ち出して欲しいと、去った身としては次の世代の方々に期待したいところです。

開設からこれまで歴史を重ねてこられたのは、歴代スタッフが多くの患者さんやご家族から本当に多くのことを学ばせて頂き、緩和ケアの重要性、必要性を実感し、そして多くの方々のご支援とご理解の賜物と深謝致しますとともに、これからも山口赤十字緩和ケア病棟を宜しくお願い申し上げます。

元 山口赤十字病院　緩和ケア内科　副部長　**高　峰 美**

まずこの20年に間に、がん治療の進歩とともに緩和ケア・緩和医療の取り巻く環境も変化した。

その一つに挙げられるのは、WHOにおける緩和ケアの定義の変化である。最初の1989年の定義と2002年の定義では、どこが違うかというと、元来は、身体的・精神的・社会的な問題に対してのケアやキュアーが挙げられていたが、2002年の定義では『スピリチュアル』と『予防』という言葉が加わった。このことは『緩和』というと、出てきた症状を和らげるという意味で、消極的・受動的な待ちの姿勢のイメージがあるが、苦痛を予防するということで、専門的な攻めの姿勢も必要であるという認識が持たれたことである。

もうひとつが『スピリチュアル』という概念である。現代ホスピスの母と呼ばれるシシリーソンダース博士によると「存在の意味や価値観に関する痛み」と言われている。また柏木　哲夫氏によると「その人が自分の存在の意味がつかめるように、その人が持っている価値観を尊重してケアすること」といっている。実はこのことは、定義の変化ではなく、緩和ケア・緩和医療の原点回帰ではないかと私は感じました。

つまり、“緩和ケア”が生まれた背景には、疾病を治癒させることや延命だけに目を向けた高度な医療の反省に立ち戻り、患者の人としての権利を取り戻すために、疾病を治癒させることが困難と診断された患者が、医療の谷間で孤立し、大切な一人の人間として存在の意味を忘れないように、最大の配慮がなされるようにという思いがある。

緩和ケア・緩和医療が生まれた現代においても、高度医療の谷間で今なお孤立し、苦しんでいる患者や家族に自分自身を取り戻すために、また少しでも生きやすく・住みやすい環境になるように、われわれ緩和ケア・緩和医療に携わるものは、変化を恐れず、また原点を忘れず、今後も緩和ケア・緩和医療に取り組みたいと改めて思いました。

元 山口赤十字病院　緩和ケア内科　副部長　**竹 内　　愛**

医師として社会に出てから、24年になります。消化器内科医として約15年勤務した後、緩和ケア科へ転向しました。そして、緩和ケア医を目指した当時、初めて指導を受けたのが、この当院緩和ケア病棟でした。1年間「笹川記念保健協力財団（現　日本財団）・ホスピス緩和ケアドクター養成研究事業による研修としてお世話になりました。現在この研修制度が残念ながら廃止となったことを思うと、自分は大変恵まれた境遇にあったと感謝致しております。その後3年間、日本赤十字社医療センターの緩和ケア科に勤務した後、再度当科に勤務させて頂いてから、早いもので5年が経とうとしております。

一言に20年と言っても、ひとつの組織がそれだけの間「続く」ということには、大きな意味があるのだろうと思います。立ち上げ当初から現在までに、関わってきた多くのスタッフの様々な思いや苦労の歴史の上に今があるのであろうことを、まずは胸に刻まなくてはなりません。

そして、この間の社会情勢や医療制度の変遷のなかで、「緩和ケア」を取り巻く状況も確実に変化してきました。現実的には診療報酬の改訂にも振り回されながら、一方ではそれぞれの場面での多様性への対応も更に必要とされています。その中でいかに自分達が大切にしているもの（ホスピスマインド）や目標を見失わず、よりよい緩和ケアを提供できるかを悩みながらの日々です。

緩和ケア業界における県外を含む対外的な印象として、「山口日赤緩和ケア科への期待を少なからず感じます。世の流れにしなやかに対応すべく、業界の最新状況を把握した上で、変えるところは「変える勇気」と、「山口日赤」が大切に継承してきたものを「守る勇気」のバランスについて、自身でも考え続けることになりそうです。そして、現場において、“共に悩み”、様々ないたみやささやかな喜びを“共に感じる”ことができる様な、そんなチームでありたいと願っております。

緩和ケア病棟カンファレンス風景

2020年度 緩和ケア病棟利用状況

年間入院患者数	144名	年間在院患者のべ数	3980名
年間退院患者数	149名	1日平均患者数	11.5名
平均病床利用率	57.6%	平均在院日数	40.4日

(2020.4.1～2021.3.31)

編 集 後 記

まず、皆様に原稿をご依頼させて頂きながら、発行が遅れましたことを紙面をお借りし、お詫び申し上げます。本来であれば2020年に発行すべきところ、新型コロナ感染症の大流行に加え緩和ケア病棟体制の大きな変更もあり、漸く20周年記念号としての緩和ケアだよりを発行するに至りました。皆様の当院緩和ケア病棟への想いや期待等を胸に、スタッフ一同、患者さんやご家族に真摯に向き合いながら、これからも一日一日を積み重ねて参りたいと考えております。ご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

(上田宏隆、金子美幸)

＊＊＊ 発行 ＊＊＊

綜合病院　山口赤十字病院　東8階緩和ケア病棟　2021年10月

〒753-8519　山口市八幡馬場53-1　☎083-923-0111 (代)